

法政大学学術機関リポジトリ

HOSEI UNIVERSITY REPOSITORY

シンポジウム「加来彰俊先生のご業績と思い出」： 戦後日本のギリシア哲学研究の流れと加来先生

著者	奥田 和夫
出版者	法政哲学会
雑誌名	法政哲学
巻	15
ページ	25-33
発行年	2019-03-30
URL	http://hdl.handle.net/10114/00021877

シンポジウム「加来彰俊先生の『業績』と『思い出』」

戦後日本のギリシア哲学研究の流れと加来先生*

奥 田 和 夫

はじめに

本稿にて言及される人物は、本稿のテーマに関して当面、必要と思われる範囲内で、しかも限られた時間内で渉猟された各種資料の中の一部に登場する方々です。したがって、ここでの言及は単なる偶然的域を出ず、また、右のテーマに関して言及すべきすべての方々を網羅しているわけではありません。（なお、引用資料の中で、「」で示された部分は奥田による補足、要約等である。）

0. 前史 田中美知太郎その他の研究者たちの努力

（昭和二〇「一九三五」年代～昭和二〇「一九四五」年代）

「前史」というと本来はケーベル博士に遡って説き起こすべきであろうが、ここではテーマに即して、また加来先生に焦点を当てて、省みることとする。

この「前史」において注目すべきは時系列順に次の諸点であろう。

昭和一三年 田中『プラトン テアイテトス』訳、注

釈（岩波書店との約束では一、二年の準

備で出版の予定であったが、出版までに十二年間引き延ばす。田中の完全主義が感じられる。）

昭和一六年 田中『ソフィスト』

昭和一七年 田中『ギリシアの智慧』

昭和二一年 田中『古典的世界から』

昭和二二年 田中『ロゴスとイデア』（所収論文は昭和一七—八年に執筆）

同年 田中、東京を離れ、京都大学に着任

昭和二五年 日本西洋古典学会 設立

関連資料1…「田中さん…中略…（以下同）」が法政大学に来られたのは昭和四年四月のことで、私が学部三年になったときであった。法政大学の文学部は漱石門下の作家や文学者が中心となって設立されたもので、著名な教授や講師が多かったが、そこへ哲学科では三木清、谷川徹三という新進の教授を迎えて、昭和初年の文学部は「黄金時代」といわれるほどの活気を呈していた。そういうかなり華やかな雰囲気のかかへ、あまり目立たずに田中さんは迎えられたのであった。（梶田啓三郎「否定の力」（『田中美知太郎全集』第一巻月報 昭和四三年一〇月）（梶田のこの文章によれば田中が法政に着任したのは昭和四年四月で

あるが、田中の著書『時代と私』では「昭和三年の春」とある。両者の文章を比較考量した結果、田中の記述の方が正しいと判断する。）

関連資料2…「しかし、今でも思ひおこすと清々しい光景ですが、東京帝国大学と言つてゐたころの東大では、例へば出先生がアリストテレスの形而上学を当時入学したばかりの私のために最初からギリシア語原典で熟読する演習をしてくださいました。参加者をあげておきますと、…寺沢恒信さん…、齋藤忍随さん、末木剛博（たけひろ）さん…で、後にこの演習はその時以来十年も続き、山本光雄先生、村治能就さん、井上忠君、加藤信朗君、岩崎充胤（ちかつぐ）君など…今日のアリストテレス全集邦訳（岩波版アリストテレス全集のいわゆる旧版）の底流ともなりました。…空襲のある時も、…研究は進められました。私は或る日感動に堪へず、「こんな乱世にかうしてギリシア古典を読むグループなんか日本中で私どもだけでせう」と幼い誇りをこめて申しました。すると出先生は、…「まだひとりをする。文理大の田中君が兵隊にとられんたつた一人の学生とプロテイノスを読みよる。あの人もえらう勉強する学者だから。」と仰言つたのを覚えて居ります。（今道友信「田中先生のこと」『田中美知太郎全集』第八巻月報 昭和

四四年九月)

加来先生・〔京都大学の哲学の伝統にあこがれて、文学部哲学科に入学したのは昭和二十一年春であったが、その年は講義がほとんど行われなかったもので、いったん田舎に帰り一年間百姓をして過ごした。そして翌年春再び上洛し、哲学書を読み散らしたが、求めるものを得る実感がなくった。〕「たしか、昭和二十二年の十月中旬であった、：京都大学に赴任された先生が古代哲学史概説の最初の講義を行なわれたのは。：私がその講義から受けた全般的な感想は、「この人の話は確実な知識にもとづいており、また自分が確実に知っていることしか言わない人だ。およそ曖昧模糊とした言葉は、この人の口からは一度も出なかった」ということであった。：古代ギリシアの勉強がどんなものであるのか、果たしてそれが私の内面の要求をほんとうに満たしてくれるものなのかどうか、そんなことは考えてみる余裕もなしに、ただもう、「この人にならついて行けそうだ。ついて行ってみよう」と、そう瞬間的に私は決心してしまったのである。もちろんその決心には、戦時中、昔の東京文理大の図書館の片隅で、先生が『思想』に掲載された諸論文を、こんな哲学論文もあるのかと思いつながら読んだことや、：文理大の掲示板に先生の休講通

知の札が出ているのを見たことがあるというような些細なことまでも、先生に関する過去の記憶の一切が一挙に結びついたのであった。それから約十八年間、先生の停年退官の時まで、ほんとにぐずぐずしながら、私は先生の教室の周辺をうろついて過ごした。そして、哲学は寝言であつてはならない、つねに正気を保って、確実に知るように努め、知っていることだけを言うようにしなければならないうと、まるで呪文を唱えるように、われとわが身に言いかせてきた。しかしこの呪文は、ほんとうに私の精神を縛ってしまった。私は最後には多少息苦しくさえていった。そこで、先生の退官を機に、解放されたいような気持ちから、一つの偶然を利用して、京都を離れて遠く弘前の地まで逃げたのであった。：しかし、長い間縛られていた人間は、解放されても、なかなか自立できないものらしい。：先生の呪縛を当分脱しられそうもない。：」（加来彰俊「最初の授業」『田中美知太郎全集』第一三卷月報 昭和四五年八月）

田中美知太郎先生は昭和三年から（戦後の昭和二年まで）法政の非常勤講師を勤められた。並行して（昭和五年より）〔前出『時代と私』による〕東京文理科大学（後の東京教育大学→筑波大学）でも非常勤講師を勤められたこ

とが右の資料でわかるが、その期間は手元の資料では不明である。ただ、加来先生について、右の資料の中の「東京文理大の図書館、掲示板」というくだりを初めて読んだ学部生のとき、おや、と思ったことを覚えてる。加来先生は高等師範学校出身であるらしいので、あるいは文理大との関係があったのかもしれない。この点は確認していない。後年、先生は市ヶ谷駅のそばを歩いているときに市ヶ谷の台地の方を見上げて「あのあたりにあった予備校に通った時期がある」と唐突に仰ったことがあった。「やはり先生は終戦前に東京におられたことがあったのだ」とわたしは驚いた。この一言に驚いた時期よりもすこし後の頃だと思うが、先生は戦争も末期になって千葉県習志野の陸軍駐屯地に召集され、「そこで終戦をむかえたんだ」と一度だけ仰ったことがある。当時住まわっていた市川市鬼高（おにたか）のご自宅で聞いたのだと思う。

1. 岩波『プラトン著作集』／各種翻訳の出版の時期

（昭和三〇「九五五」年代～昭和四〇「二九六五」年代）

昭和三二年 田中・藤澤『プラトン著作集 パイドロス』（岩波書店）

昭和三五年 田中・加来『プラトン著作集 ゴルギアス』（岩波書店）

昭和四三～四八年 出・山本監修『アリストテレス全集』全一七巻（岩波書店）

昭和四三年 古代哲学会編『古代哲学研究

METHODOS』創刊 現在に至る

昭和四六～五四年 向坂編集『プラトン著作集』全四巻（勁草書房）

昭和四八～五二年 山本編集『プラトン全集』全一〇巻別巻一（角川書店）

昭和四九～五三年 田中・藤沢編集『プラトン全集』全一五巻別巻一（岩波書店）

（昭和四三年 藤沢令夫『実在と価値』（筑摩書房）

この他、詳細は省くが、昭和四〇年代には『世界文学全集』（筑摩書房）、『世界古典文学全集』（同前）、『世界の名著』（中央公論社）、『プラトン名著集』（新潮社）、『世界の大思想』（河出書房）、『ギリシア悲劇全集』（人文書院）など多くのギリシア哲学・古典の著作を含む翻訳書（全集・シリーズもの）が出版され、またソクラテス以前の哲学者の断片抜粋集やプラトン、アリストテレスの個々の著作も多く翻訳・紹介された。加来先生の翻訳も比較的多い。

ここで特筆すべきは、『プラトン著作集 ギルギアス』（序説・訳文・註解・研究用註〔ギリシア語原典への注釈〕・索引）の出版である。この書は『テアイテトス』訳・注釈（田中美知太郎著）に連なる新企画として、『プラトン著作集 バイドロス』（藤澤令夫著）と前後して同じ構成によって出版された。これら三巻の注釈書は、わが国西洋古代哲学研究史上のいわば金字塔をなすものである。（残念なことに、この岩波『プラトン著作集』シリーズは右の二巻のみの出版で途絶えてしまった。後の岩波書店『プラトン全集』はこのシリーズを形を変えて（つまり翻訳と解説のみを提供するという形で）継承したものである。

加来先生…昭和三十一年 「プラトンの正義論」

昭和三十八年 「十九世紀の哲学史家」

同 「歴史記述の客観性」

昭和四〇年 弘前大学へ助教授として赴任。

同 『思想の歴史 Ⅰ ギリシアの詩

と哲学』（共著）

昭和四一年 「徳（アレテー）と知（エピス

テメー） Ⅰ」

昭和四二年 「プラトンの政治論——哲学との

関係において」「問答法の特質」

昭和四三年 「徳（アレテー）と知（エピス

テメー） Ⅱ」

2. ギリシア哲学研究の隆盛

（昭和五〇〔一九七五〕年代～平成一〇〔一九九八〕年代）

昭和五四～五九年 田中『プラトン』（Ⅰ～Ⅳ）

昭和五五年 藤沢『イデアと世界 哲学の基本問題』

（岩波書店）

『ギリシア哲学と現代 世界観のあり

かた』（岩波新書）

この時期、田中、出を仮に第一世代とするならば、その教え子たちはもちろん、さらにその教え子たちの世代が育ち始め、わが国におけるギリシア哲学研究の隆盛期を迎える（と言えると思う）。

また、この時期には欧米に留学する院生、若手の研究者も徐々に増え始め、海外の研究者との交流も活発になり始める。結果、日本の研究者の研究水準の高さも海外の研究者の間に認識され始める。

加来先生・昭和四八年 「加来君頼む」という田中の願
いにより、**法政大学文学部に移籍**する。七〇年安保闘
争で荒れた哲学科再建の要請（梶田啓三郎による）を
受けてのことであった。

昭和五二年 「哲人王と法の支配（一）」——プラトンの
政治思想についての若干の覚書」

昭和五三年 『プラトン全集別巻総索引』（編集協力）
昭和五七年 「哲人王と法の支配（二）」——プラトンの

『政治家』を中心にして」

昭和五八年 田中『市民と国家』（編集・解説）

昭和五九年～平成六年 デイオゲネス・ラエルティオ

ス『ギリシア哲学者列伝』

昭和六一年 「正義論の原型」

昭和六二年 田中『戦後四十年の発言』（共編・解説）

平成 五年 法政大学停年退職

平成一六年 『ソクラテスはなぜ死んだのか』

平成一八年 『デモステネス 弁論集一』（共訳・解説）

平成一九年 『プラトンの弁明——ギリシア哲学小論

集』（論文集）

加来先生が法政に移る際、哲学科に在籍していた先生方
は矢内原伊作先生と斎藤哲郎（せつお）先生のお二人のみ

となっていた。そこに加来先生、熊本大学から濱田義文先
生、そして東大教養部をご退職されて前年より非常勤講師
としていらしていた山崎正一先生が加わり、新体制の哲学
科が発足することとなった。

この昭和四〇年代末から昭和五〇年代末頃まで、加来先
生は『プラトン全集』とくに別巻作成への協力、田中の大
著『プラトン』の校正に従事し、またデイオゲネス・ラエ
ルティオスの翻訳に着手されていた。学部長に続き常務理
事の職にあった時期である。

3. 法政の大学院での演習で読まれたテキスト （ギリシア語原典）その他

以下に挙げるテキストは、奥田が出席した昭和五四年度
以降、加来先生が停年退職された後、非常勤でさらに五年
間授業をもたれた平成十年までのものである。（記憶によ
るもので、精査していません。ほぼ年度順です。）

プラトン『国家』第五―七巻、同『ピレボス』、同
『ティマイオス』、同『ソピステス』、同『ポリティ
コス』、同『パルメニデス』、アリストテレス『ニコ
マコス倫理学』第六巻、同『分析論後書』、プロ

ティノス『善なるもの 一なるもの』、プラトン『第七書簡』（その他、加来先生の理事在職中に北嶋美雪先生が担当されて、『饗宴』、『国家』第1巻以降を講読した年度もある。この『国家』の講読は北嶋先生が法政の授業を離れた後も続き本務校の学習院大学で続けられ、法政の院生も参加した。）

わたしが初めて参加した昭和五四年度には修士課程の演習において前年度よりの継続でアリストテレスの『形而上学』をロウブ・クラシカル・ライブラリー（希英対訳）版の英訳を主にして講読がなされていた。古代哲学専攻の院生は少なく（博士後期課程一名、修士課程はわたしを含めて二名）、近代哲学専攻の院生が多かったため、後者の院生にも受講が可能ないように配慮されていたためである。ギリシア語原典の講読は博士後期課程に在籍しておられた先輩のための授業でおこなわれた。前年度から読み始められていた『国家』中心巻（第五―七巻）の講読は、この年、第六巻に入るところであったと記憶する。

ギリシア語原典購読の演習のすすめ方は、はじめにアトランダムに指名される院生が訳し、先生が気づいた点を注意する、ないし訳の根拠を質す。そのやりとりが終わったのち、先生ご自身が再度丁寧に訳し直された。このスタイ

ルは以後、ずっと変わりはなかった。

わたしが修士課程三年目になったとき（昭和五六年度）、弘前大学から筑波大学に移られていた野町啓（あきら）先生が筑波大学の修士課程の院生二名と、非常勤講師として出講されていた早稲田大学の博士課程の院生一名を同伴されて法政の加来先生の演習に出席されることになった。この年度から『ティマイオス』を講読することになったためだ。――というより、加来先生と野町先生との間でいっしょに『ティマイオス』を読むことが相談されたのかもしれない。演習はこの年度からにわかに活気を呈し、ほぼ二時限連続の演習となった（実質は二時間三〇分ほど）。わたしなども演習の前日は準備のために毎週徹夜をし、そのまま翌日のお昼に大学に向かうこととなった。法政の近代哲学専攻の院生たちも、コーンフォードのランニングコンメンタリー付きの英訳を携えて参加した。『ティマイオス』は二年かけて読了したが、このように他大の院からの出席者はさらに増え、『ティマイオス』の後、『ソピステス』以降の後期著作を読むこととなった。そしてこのような状態が数年続いた。わたしも徹夜明けのまま演習に出席することがずっと常態となった。（もう少し計画的に予習はできなかったものか、と今は思う。が、当時は演習日前日にテキストを開くと、ギリシア語読解で誰にも負けた

くない一心であった、と思う。加来先生の許にいる者として。）

この『ティマイオス』を読む演習の頃、わたしは古代哲学専攻の後輩の院生たちとコンフォードのランニングコンメンタリーや『ティマイオス』に関連する外国論文の要約を報告する時間を演習の中に設けたいと先生に申し出たことがある。出席者のためにもなり、先生にも歓迎していただけたらと思ったからだ。しかし先生の反応は冷ややかであつた。「まあ、すこし時間をあげるから、聞くだけ聞いてやろう」という様子であつた。この要約報告はしばらく続いたが、演習のためのギリシア語テキストの徹底的下調べと両立させることは難しく、やがて夏の合宿などで報告することに變更した。そして先生の冷ややかな反応は、演習ではテキストを正確に読む努力に集中すべし、という田中美知太郎先生の教えからの当然の反応なのだ、とあとから気づいた。

話は変わるが、『ティマイオス』を読み始めた昭和五六年末に右にのべた筑波、早稲田、法政の院生に加え、当時加来先生が非常勤で出講しておられた慶応、日大、学習院の院生を加えて、「西洋古典研究会」が発足した。この研究会が成立したきっかけは、すでに日大で向坂寛（ゆたか）先生（故人 加来先生の後輩）の下で院生たちによる

古代哲学の研究会が存在していたことにある。ただし、その日大の研究会の独立性はそのままに、これとは別の新たな研究会を複数の大学院の院生を会員として発足させたわけである。その準備のための会合が初冬の神楽坂、「鮎忠」二階のこじんまりとした座敷であつた。向坂先生と加来先生、幹事となる複数の大学院の院生が数名集まつた。会の名称を決めるとき、「日本西洋古典学会」の機関誌『西洋古典学研究』（岩波書店刊）にあやかつて、「西洋古典学研究会」としよう、という案が出されたが、「学」と「研究」がだぶるのはおかしい、とわたしが言い張つて、会の名称は「西洋古典研究会」となつた。「うぶ」なわたしたちをお二人の先生方は見守つてくださつていた。

この時以来、年二回、夏冬の研究会は一度も欠けることなく続き（意地で開催したこともある）、二〇一九年の夏には第七六回目の研究会が開かれ、満三八年を目前にしている。ささやかな研究会ではあるが、多くの研究者が巣立つた。それは関係した大学の先生方、すなわち日大の向坂寛先生（故人）、早大の小山宙丸先生（故人）、丸野稔先生、学習院大の北嶋美雪先生、左近司祥子先生、筑波大の野町啓先生（故人）、池田美恵先生（故人）、学芸大の田之頭安彦先生（故人）、東海大の久保田忠利先生、岩波書店・法政の田中博明先生そして加来彰俊先生の、親心の賜物である。

4. 研究史における、ひとつの時代の終わり

本稿で言及された主な研究者、あるいは加来先生に直接関わる研究者の没年（月）を列挙すると次のようになる。

昭和五五年「一九八〇」三月 出隆 逝去

昭和六〇年「一九八五」二月 向坂寛 逝去（享年

五七歳）

一二月 田中美知太郎 逝去

平成 二年「一九九〇」 榊田啓三郎 逝去

平成 九年「一九九七」 池田美恵 逝去

平成一五年「二〇〇三」 二月 田之頭安彦 逝去



還暦を迎えられた当日のお祝いの会
1983年1月29日 神楽坂にて

平成一六年「二〇〇四」二月 藤澤令夫 逝去

平成二四年「二〇一二」一〇月 今道友信 逝去

平成二九年「二〇一七」五月 野町啓 逝去

七月 加来彰俊 逝去（享年九四歳）

田中美知太郎先生が亡くなられてから加来先生の逝去までに約三〇年の隔たりがあるけれども、子弟の間柄としての一つの括りが閉じられたということでは研究史のひとつの時代が終わったといえるかもしれない。

かくして九〇余年の歳月をかけてわが国のギリシア哲学研究の基礎が築かれた。それがどれだけ強固なものとしてあり続けるのかは、それがどのようにに継承されていくのか、という問題であろうか。

* 本稿は、二〇一八年五月二六日（土）に開催された第三八回大会の企画「シンポジウム 加来彰俊先生のご業績と「思い出」の提題として配布した資料をもとに作成された。当日わたしの提題タイトルは「戦後日本のギリシア哲学研究の流れと加来先生／法政大学での加来先生」であったが、本稿では見られるように最後の部分を削除し、資料本文に加筆した。

（了）